

題目：「自己のための異時点間選択と他者のための異時点間選択との関係」についての心理物理学的分析

氏名：徳田真佑

指導教員：高橋泰城

【目的】(1)「自己のための異時点間選択（「早くもらえる小さな報酬」と「遅くまで待たないともらえない大きな報酬」との間の選択）」と「他者のための異時点間選択」とを比較し、(2)その相違の心理物理学的原因を検証すること。【方法】北海道大学の学生 24 名（女性 15 名、男性 9 名、平均年齢  $19.9 \pm 0.47$ ）に対し、異時点間選択課題（「自己のため」と「他人のため」の 2 条件）と時間知覚課題（「自己のため」と「他人のため」の 2 条件）、および価値知覚課題（「自己のため」と「他人のため」の 2 条件）を行なった。さらに、異時点間選択を物理時間において及び心理時間（時間知覚課題において測定されたもの）において分析したものを比較した。また、異時点間選択を客観的報酬量（金額）および主観価値（価値知覚課題において測定されたもの）において分析したものを比較した。【結果】(1)物理時間においては「自己のための異時点間選択」と「他者のための異時点間選択」には相違があったが、心理時間においてはその相違が小さかった。一方その相違は、価値を客観的な報酬量として分析した場合と価値を主観的なものとして分析した場合とで変化が見られなかった。(2)「自己のため」と「他者のため」の異時点間選択の相違の心理物理学的原因は、「自己のため」と「他者のため」の異時点間選択にそれぞれ用いられている心理時間が異なることである。【議論】本研究の結果に関しては、Value Based Account 理論 (Loewenstein&Prelec,1992 ; 「割引き方の違い」は「価値知覚の違い」に原因があると仮定する理論)よりも Tempospect 理論(Takahashi&Han,2012 ; 「割引き方の違い」は「時間知覚の違い」に原因があると仮定する理論)の方が説明力があつた。行動経済学や神経経済学においても、価値関数という主観的価値だけではなく心理時間に着目した研究が必要であると結論できる。